

寛仁四年七月四日

三七四

あふこと〔をイ〕のきのふとおもへはあやめくさけふさへそてにねをそかけつる

人の、うたおほうよみてをこせたりし、返、○本集、コノ歌ヲ重出シ、哥いとようよみてをこせたるかへりことにニ作ル、

これはみつえこそしらねわかこひはかきつくすへきかたしなけれは○重出ノ歌、二句ナ、結句ヲかたもナ、結句ヲかたもナ、結句はニ作ル、

かたらふ人のたえて、としころありて、たれをかいまはかたらふなといひをこせ
たれば、

とふ人もいまはなしわかみわの山すきにしかたをあはれと思ふ

月をみて、ひさしくあはぬ人のもとに、年のはてに、

としせてきみかこひしくおほゆるはあはぬ月日のつもるなるへし

をとにはきゝて、またみぬ人を見て、

見ぬほとはいふかしかりきみてのちはものいはまくのほしきゝみかな

侍所にて人のものしたまひて、又のつとめてかへり〔給にイ〕、かはきりのたつを見て、
かくてこそあらまほしけれいつちとてたちわかるらんけさのあさきり

〔後拾遺和歌集〕

十八
雜四

絶エタル人

未ダ逢ハザ
ル人

故郷ヲ離レ
タル人

送別

かたらはんといひて、道命法師のもとにまうてきたる人の、よみはへりける、

よみ人しらす

たえやせんいのちそしらぬ水なせ川よしなかれても心みよ君

〔道命阿奢利集〕

○宮内廳書陵
部所藏桂宮本

とをきところより人のいへる、

ふるさとはうきことしけくありしかとみかさの山そこひしかりける
かへし

おもひやれうきことしけき故郷にこひしさ〔きイ〕そへてなけくこゝろを
人くあつまりてものへゆくに、餞すとて、

思出もなきふるさとのおもひいてにけふをや人のいはむとすらん
たつとて、そこにある人にかはらけとらすとて、

きみゆへそ人もきてみる山さくらおらんかきりはたえすさかなん
人くあつまりてさけなとのまするに、ものへゆくひとに、

かくはかりあはれさやけき月をみていかなるよにかみるへかるらん

寛仁四年七月四日

三七五

寛仁四年七月四日

三七六

又

おもひいてしなきふるさとの思出にけふをや人のいはむとすらん

人ノ死ヲ悼ム

人のなくなりたりし所にて、郭公まつこころよみしに、

郭公なくこゑきかはまつとはんしての山路を人やこえしと○續古今和歌集、コノ歌ヲ收ム、

めうせたりける人をしらて、いみなとはて、

世中をわかれにし人ありけむと山ほととぎすなくにこそしれ〔きけい〕

あるしうせ給へる所の花さきたるをみて、

あたなりとなけきし人のよをみれば花のうへとそいふへかりける

人のうせたまへるところの花をみて、三首、

さくら花おしみし人をわすれすはたつねてもさけしての山へ○外二 首略ス、

人のうせたまへる所にて、月なとある夜、花みてよめる、

さくら花ちりにし枝のこひしきにみるそらもなし夜半の月かけ○外一 首略ス、

人のうせ給へるところの、あはれなる哥をいとほほうよみあつめて、さうしにか

悼歌ノ草子ヲ覽ル

きて、みせにをこせたるに、見はてゝかへしやるとて、
ゆゝしくもけにみゆるかないかてかくかなしきことをかきあつめけん

はらからうせたりし人の御もとに、五月ついたちころ、

つねよりもいかにまつらん郭公きみかゆきにしみちのゆかりに

ある人の、子うしなひたるにやる、

はかなさはすへてこのよのことなれときみいかはかり思しるらん

かへし

おしからぬみはつゆよりもきえなくてはかなきことを見るそかなしき

正月、人のなくなりたるところにて、

きみかありしはるのうちとそ思いつるたのみさへこそいまはたえぬれ

○道命法師集ヲ以テ校ス、

〔千載和歌集〕

九 哀傷哥

したしかりける人、身まかりにけるによめる、道命法師

をくれしとおもへとしなぬ我身かな獨やしらぬ道を行らむ

〔道命阿奢利集〕

○宮内廳書陵部所藏桂宮本

贈答

寛仁四年七月四日

三七七

筍

女郎花

竹實

若菜

梅花

野老

辛夷

寛仁四年七月四日

三七八

たかむな人のもとにたてまつりて、二日はかりありてきこえし、
をともせてきのふもたゞにくれたけのあなおほつかなよのほともいかに
人のもとに、女郎花やるとて、

きみゆへにてをふるゝかなをみなへしこゝろをくらす野邊の白露

しねこといふ物を、人のをこせたるに、

さためたるつまもきこえぬたけのこはいくよはかりのしるしなるらん

正月七日、はるのたつとし、○寛弘元年ナラン、人のもとにわかなたてまつるに、

いつしかもきみにとおもへは春霞たつやをそきとわかなをそつむ

ゆきふる日、「のイアリ」むめの花をおりて、人のもとに、

ふる雪にいまはまかへしむめのはなおりけむ袖にゝほひまさりて

ところの、木のえたのやうにて、一尺はかりなるを、人のもとに、

をとにきくこまもろこしはひろくともかゝるところはあらしとそおもふ

こふしの花を、人のもとにやるとて、

わかやとのこふしのはなをうちとけてかさしにさすなかまちあやうし

かへし

つよからぬこふしの花はうちかへし人におらるゝものとしらなむ

○道命法師集ヲ以テ校ス

〔新古今和歌集〕

春哥上

やへさくらをおりて、人のつかはして侍ければ、

道命法師

八重櫻

しら雲の立田の山の八重櫻いつれを花とわきておりけん

〔道命阿奢利集〕

○宮内廳書陵部所藏桂宮本

法輪にありしころ、花をおりて人に、

おほろけかあらしの山にさく花をひと枝にても見するこゝろを

わかかなを、ほうりむにて、

わかかなゆへ野邊にもいてゝこゝろからをくらの山につまむとそおもふ

ほうりむに侍けるころ、「ひイナシ」もみちのしたりしを、人の御もとにたてまつりし、

人もみぬをくらの山の紅葉々やなたかゝるよのにしきなるらん

法輪なりしころ、水風にゝたりといふ題を、

法輪寺ニ住ス

寛仁四年七月四日

三七九

寛仁四年七月四日

三八〇

水のおもの風にまかふるおほる河あらしの山のかけやうつれる

法輪より人のもとに、ほたるいとおほかり、みにおはせよといひやりたれば、人のかくいふ、

いつらきみありとたのめしほたるたに

といへは、

なきにてをしれをくら山とは

法輪に人のまいりて、日の暮ぬと、いそくに、○新古今和歌集、法輪寺にすみはへりけるに人のまうてきてくれぬとていそき侍

ければ二作ル、

いつとなきをくらの山のかけをみてくれぬと人のいそくめるかな

法輪よりかへる人に、

くる人のしはしとまらはおほる河のせきもいかにうれしからまし

いみしうしのひて法輪にこもりたりしに、人のきつつけてたつねたりしかは、

たれその人しれぬ人とふ人はるせきのみつのもりもこそすれ

法輪に侍るころ、人くまてきて、題三いたしてよむ、くれのはる

いさゆきてあさ日のたけにやとからんをくらの山ははるくれにけり

時鳥

夏くれとかひこそなけれほととぎすいやとをにこそとをくなるなれ

やまさと

わかやとのかとたのなへにとりをは山ほととぎすおとろきやせむ

○道命法師集ヲ以テ校ス、

〔千載和歌集〕

秋四

法輪寺にまうて侍けるに、さか野の花見てよめる、

○桂宮本道命阿奢利集、さかに花みにまかりて二作ル、

道命法師

花すゝきまねくはさかとしりなからととまる物は心なりけり

○同集、三句ヲしりぬれと二作ル、

〔詞花和歌集〕

秋三

春より法輪寺にこもりて侍ける秋、大井河に紅葉のひまなくなれけるをみてよ

める、

道命法師

春雨のあやをりかけし水の面に秋はもみちのにしきをそしく

〔道命阿奢利集〕

○宮内廳書陵部所藏桂宮本

寛仁四年七月四日

三八一

寛仁四年七月四日

大井河のつらにて月をみる、

月かけのるせきに月もとゝまらはこゝをかつらといはましものを
正月、大井河のつらにて、

はるはまたあきになるへし大井河そのみくすのいろもかはらす
かめ山を、

大井河みつにうかへるかけゆへやかめ山の名もよになかれけむ

大井河にうかふかゝりをみて、○新拾遺和歌集、大井河
のかゝり火を見てニ作ル、

ひさかたの月のかつらのちかけれはほしとそみゆるかゝりひのかけ

○同集、結句ヲせ、
のかゝり火ニ作ル、

大井河にうかひなとするをみて、かへりて、おかしかる人に、

かゝりひをとす河へもかはらねとなをそのくれのこゝちこそすれ

九月はかりに、ものへまうつるに、おほるかはに紅葉のなかるゝをみて、

もみちはのゆくゑをみれば大井河かはくたりこそあきはすきけれ

子の日、まつのおにて人々あまたくたりしに、
「レリアリ」

龜山

鶴飼

松尾ノ子日
宴

三八二

廣澤池ヲ見
ル

清水寺ニ參
詣ス

大原ニ寓居
ス

ひきつれてけふは子の日をしつるかなまつのを山のねをたつねつゝ

ひろさはといふ所にまかりたり、人々ありて、いけみつのきよくもあるかなと

いひて哥よみしに、かはらけとりて、

いけ水のなからましかはやまさとにひとりや人のすむへかりける

きよみつにまうてゝ、花のちるをみて、

しけるはもあはれとそおもふ山さくらちりにし花のゆかりとおもへは

花みる人々侍けるか、かへらんとするに、

もろともに花みる人もいまはとてをのがちり々ならんとそおもふ

きよみつにまうてゝ侍に、花のちるをみて、たきのもとにて、

にこりなき水とき々しをこのころそやまのさくらのちりいりにける

大原といふ所にあるころ、法輪にこもりたる人に、郭公なくとき々てやる、

ほとゝきすあらしの山にすむ人はこのおほはらのさとにきてきけ

おなしころ、人のもとに、

寛仁四年七月四日

三八三

寛仁四年七月四日

三八四

わかやとはおほはら山のほとゝきすこのほとこゑをきかせてしかな
又おなしころ、

なにこともきかまくほしきおく山に人たのめなるほとゝきすかな

鞍馬ニ参詣
ス
あつのふ

くらまにまうてたりしに、あつのふまであひて、よひとよをこのふこゑし侍し、
つとめてやりし、

名にたかきくらまの山をきてみればのりとゝめたるところなりけり

かへし

名にたかきくらまの山のたかきねはきみにひかれてたつにやはあらぬ

五月に、くらまにまうて侍しに、

さつきやみくらまの山にほとゝきすたとるゝやなきわたるらん
ほとゝきすあかつきかたの一聲をなかゝきかてあらましものを

五月つこもりに、くらまにまうてたるに、郭公をきゝて、

しもつやみくらまの山のほとゝきすたとるゝそなきわたるなる

逢坂ヲ越ユ

朝日山ヲ見
ル

長柄橋ノ邊
ヲ過グ

熊野ニ参詣
ス

志摩國ニ到
ル
浦
わ
れ
か
ら
の

なはの瀧

十二月つこもりの日、あふさかこえしに、

めにみえはとふらはましをあらたまのとしもせきよりけふやこゆるん

あさ日山といふをみて、

うちはへてあさひの山のやま人はくるゝもしらすなかめをそする

○道命法師集
ヲ以テ校ス

〔千載和歌集〕

十六
雑
上

長柄の橋のわたりにて、

道命法師

何事もかはりゆくめる世中に昔なからはし柱哉

〔道命阿奢利集〕

○宮内廳書陵
部所藏桂宮本

くまのへまうてゝ、みちに月をみて、

はるゝとめのゆくかきりなかわれとあくよしもなきは山のはの月

くまのよりかへりしに、しまのくにわれからのうらといふところにて、

われからときゝしところをきてみればけにしほたるゝうらにそありける

なはのたきにて、

寛仁四年七月四日

三八五

寛仁四年七月四日

三八六

いはまよりをちくるたきのしらいとみきはによるはあはにそありける
しまの國にしきの浦といふ所にて、○後拾遺和歌集、錦の浦、
といふところにて二作ル、
名にたてるにしきのうらをきてみればかつかぬあまはすくなかりけり
○同集、初句ヲ名
にたかき二作ル、
かもめのおほ〔くい〕あそふ浦にて、

よそのめにいはうつなみとみえつるはいそへにあそふかもめなりけり
井せきの山といふ所にて、○本集、コノ一首ヲ重出シ、くまのへ
まいるにるせきの山こゆとて二作ル、
なかれいつるなみたはかりをさきたてゝるせきの山をけふこゆるかな
○重出ノ歌、初句
ヲなかれゆく二作
ル、新續古今和歌集及ビ萬
代和歌集、又コノ歌ヲ收ム、

ひつのうらといふ所にて、なみのたつをみて、
ひつのうらにたつしらなみをよそ人はむしりかけたるわたかとそみる
みちより人のもとに、

ゆく道のいやはる／＼となりぬれはあひむほともとをくこそなれ
いてたつ日、あるところより、
はかなさのさためなきよのわかれちにさきたつ物はなみたなりけり
○本集、コノ歌ヲ重
出シ、四句ヲとまら

ぬものは
二作ル、

御返

かへりこむこともまれなるわかれちを〔トイアリ〕なになみたもとゝめてよきみ
人の御もとにたてまつる、
○本集、コノ
歌ヲ重出ス、

わかれちこれやかきりのたひならんさらに行くへきこゝちこそせね
又、人に、○後拾遺和歌集、熊野へまいるとて
人のもとにいひつかはしける二作ル、
わするなよわするときはみくまの〔トイ〕うらのはまゆふうらみかさねん
あすやまうすると、人のゝたまへるに、○道命法師集、あすノ右ニ
名乗歎又あす歎ト傍書ス、
みやこ人みえはきみをはとひつへしけふゆくにこそわれをしられめ
いてたつ日、

あまふねにのりて、
のれはうくのらねはしつむわかみかななをかきなかせあまのつりふね
○道命法師集
ヲ以テ校ス、

寛仁四年七月四日

三八七

寛仁四年七月四日

〔千載和歌集〕

七 離別哥

三八八

修行ニ出ツ

修行にいて、熊野にまうて侍ける時、人につかはしける、

道命法師

もろともに行人もなき別路に泪はかりそとまらさりける

〔新古今和歌集〕

九 離別哥

修行に出たつとて、人の許につかはしける、 道命法師

わかれちはこれや限の旅ならん更にいくへき心地こそせね

〔古今著聞集〕

十八 飲食二十八

道命阿闍梨修行しありきけるに、やまうとの、物をく

蕎麥ヲ食ス

はせたりけるを、これはなにもそのと問ければ、かしこにひたはへて侍るそまむきな

んこれなりといふを聞て、よみ侍ける、

〔道命阿奢利集〕

○宮内廳書陵部所藏桂宮本

山寺に侍しころ、

山寺ニ籠ル

世をそむくところとき「ある」ておく山は物おもふにそいるへかりける
○新古今和歌集、二句ヲ所とかきくニ、四句

ひたはへて鳥たにすへぬそまむきにしつきぬへき心地こそすれ

ヲ物思ひに
そニ作ル、

やまてらにこもりて、人のもとにやり侍し、

日にそへておほつかなさのまさるかなあひみえし日やとをさかるらん

かへし

あふことのいつとなきたにわひしきにむつれしほとのとをさかるらん

都ヲ眺ム

山寺にて都のかたをみやりて、

みやこをはうしとて山にいりしかとそなたにむきて目をくらすかな
○萬代和歌集、コノ歌ヲ收ム、

山寺ノ櫻花

山寺にいきたりしに、やへさくらのみえしを、人にやり侍し、

白雲の八重たつ山のさくら花いつれを花とわきておりけん

五月五日、やまてらより人のかりやる、

さゝのいほにあやめのくさをふきそへてひまなくけふは人そこひしき

山てらにまかりて、花をみて、

うしろめた山のさくらをみるほとにみやこの花はちりやしぬらん

山寺ノ秋風

秋、山寺にまかりこもりて、しはくありて人に、

寛仁四年七月四日

三八九

寛仁四年七月四日

三九〇

秋風のはけしき山にいりしよりあゆふくさはにつけてかなしも

山寺に、花みる人にさそはれてまかりて、いとおかしうおほえしかは、
なにゝわれけふもろともにてつらんのちのひぬるこゝちこそすれ

侍る山寺にまかりかへりたるに、花のみなちりにけるをみて、よみ侍ける、
きてみむといひしきくらはちりにけりなをおもふことたかふみなりや

こゝろうくおしみし花はちりはへてなといとふみのひさしかるらん
ふかき山寺にこもりたるころ、卯花をみて、

世中をそむきにいりしやまにさへなをうのはなのさきけるものを

山寺にあるに、雨〔そい〕なとふりてあはれなるよ、人に、
うてきて哥なと讀ける
つゐてによめる二作ル、○千載和歌集、山寺にこもりて侍ける比雨降て心ほそかりけるに人のま

かくてたになをあはれなるおく山のきみ〔こい〕ぬよゝをおもひやらなん
をおもひしら
なむ二作ル、○同集、三句以下ヲ
おく山に君こぬよゝ

もみちのこるやまてらに、あつまりていきたりしに、
かゝるひはあらしとそおもふしらくものみねのもみちをたちかくすかな

山寺ノ紅葉

山寺ノ夜雨

山寺ノ卯花

正月ニ山ニ
籠ル

人々あつまりて、あそひなとして、かはらけとりてうたよむに、
いへてせむほとはいくらといさこよひもみちしたらん山〔はい〕へいりなん

正月七日すくして、山よりいてたるに、かゝみにつけて人々よみけるに、
ますかゝみてすくしてし身なれともちとせはきみかかけにかくれん

山寺に、人にさそはれて花みにまかりて、かはらけとりてそなるひとに、
きみゆへに人もきてみるさくら花おらんかきりはたえすさかなん

五月、いみしうくらきに、山寺にてほたるをみて、
さをしかのをとろきぬへきなつ山のこのしたやみにてるほたるかな
○道命法師集
ヲ以テ校ス

〔後拾遺和歌集〕戀十一

返事せぬ人に、山寺にまかりてつかはしける、道命法師

思侘きのふ山へに入しかとふみゝぬみちはゆかれさりけり

〔詞花和歌集〕夏二

山寺にこもりて侍けるに、郭公のなき侍らさりければよめる、

道命法師

山寺ノ郭公

山寺ノ螢

寛仁四年七月四日

三九一

寛仁四年七月四日

三九二

山さとのかひこそなけれ郭公みやこの人もかくや待らん
〔千載和歌集〕^三 夏哥

山寺にこもりて侍けるに、時鳥のなかさりければよめる、
道命法師

あやしきはまつ人からか郭公なかぬにさへもぬる、袖かな

〔道命阿奢利集〕^{○宮内廳書陵部所藏桂宮本}

花いみしうさきたるころ、山さとにゆきのふるをみて、
雪きえぬ山のたかねにすむ人はみやこの花をなにとみるらん
かへし

山里ノ春雪
山里ノ櫻花

をのかすむやまにならひてさらはこのみやこの花をゆきとこそみれ
山さとに花のちるをみて、

山田ノ鳴子

おりにくと人やつけゝん山さとにのこらす花はちりにけるかな
山さとにて、よるのひたのをとをきゝて、

あしひきの山田のひたのをとたかみころにもあらぬねさめをそする
○玉葉和歌集、コノ歌ヲ收ム、

いみしうあはれなるやまさとに、花のいみしうちるを見て、
しろたへのゆきふるさとみえつるはやまのさくらのちるにそありける
哥よみしに、山里にてかはらけとりて、

親ヲ海ニ投
ゼシ衛門尉
ヲ詠ム

いけみつのなからましかは山さとにひとりや人のすむへかりける
〔清少納言枕草子〕^下 ○内閣文庫三卷本 ゑもんのそうなりけるものゝ、ゑせなるお

とこ親をもたりて、人の見るにおもてふせなりとくるしう思ひけるか、いよの國より
のほると浪におとしいれけるを、人の心はかりあさましかりける事なしと淺ましか
るほとに、七月十五日、ほんたてまつるとて、いそくを見給ひて、たうめいあさり、
わたつ海におやおしいれてこのぬしのほんする見るそあはれなりける
○續詞花和歌集、コノ

名ノ訓ミ
たうめい

歌ヲ
收ム、
とよみ給けんこそをかしけれ、○世繼物語 異事ナシ、

〔道命阿奢利集〕^{○宮内廳書陵部所藏桂宮本}

いちまつりことみて、人／＼のかのよのことおもひやりしによめりし、
をみて、
ニ作ル、
○萬代和歌集、著駄政〔欽〕

著欽政ヲ見
ル

寛仁四年七月四日

三九三

寛仁四年七月四日

三九四

はかなくも人のうへにて見ゆるかなあのよこのよのへたてはかりに
はかりを
二作ル、
○同集、三句ヲ思ふ
哉ニ、結句ヲへたて

和歌ノ贈答
立春

こむといひてこぬ人に、春たつ日、

いまこむといひし人たに見えなくにおもひのほかきたる春かな

としはこえて春はまたこぬに、人のもとに、

としはこえ春はまたこぬ山里のそのつれくをおもひやれきみ

つかさのそむ人の、こと人になら^{〔さい〕}れてなけくときしに、

櫻花いろものこらすひとすちにおもひなきえそ春のあは雪

人のきてかへるに、

きのふわかうれしとおもふころこそかへりてけふのあたにはありけれ

かへりて、又やりし、

きのふをはものおもほえてすくしてき物おもほゆるけふいかにせむ

人のかくいひたる、

なそやよにふれはものゝみかなしきにあめのしたよりいつちゆかまし

孤獨ノ人ヲ
慰ム

訪客ヲ送ル

失望ヲ慰ム

かへし、いひやる、

人はいさわれはこのよもいとはれすたゝみのうきとおもひしりにき
みる人はみなくくなりぬわれをたれあはれとたにもいはむとすらん
花さかりおもふことなきはるならはいくたひきみをわれさそはまし

ひむなきころにて、あそひもえせて人にいひやる、

郭公きくとはなくて世のなかをなけきかほにていさややまへに

とはぬ人のもとにやる、

かすならぬみをこそ人のとはすともあなおほつかなきみはいかにそ

あやめくさひとよはかりとおもひしをけふもたもとにねはかゝりけり

侍るところにおひたるしのふくさを、ふみにさすとて、人のとるをみて、

いつかたにゆかむとすらんしのふくさふりにしやとのつまをわするな

正月つこもりに、人にやる、

いますこしふかくもはるのなりなゝんはなみかてらにくる人やあると

よのなかのいとはかなうきこゆるころ、

世ヲ憐ム

寛仁四年七月四日

三九五

忍草

寛仁四年七月四日

三九六

あたなりとなけかれなくに山さくらよのはかなさをいかにきくらん
○本集、コノ歌ヲ重出シ、二句ヲなけかれなからニ作ル、

わかやとの花ならねともちるときはよそのことゝもおほえさりけり

訪客ヲ悦ブ

三月つこもりに人のきたるに、

春はすきなつはまたこぬゆふくれのつれ／＼なるにきたるはるかな

やへさくらおりて人のみするに、ある人のもとにかくれるて、うちよりとて車を

かりにをこせたりしにいひやりし、

こゝのへのうちとの心ある人をひとへのみもたのみけるかな

方違

歳内に節分あるとし、かたゝかへにものへまかりて、月をみて、

あらたまのとしはしらねとありあけの月はかはらぬ物にそありける
○本集、コノ歌ヲ重出シ、下句ヲ月のかはらぬことそあやしきニ作ル、

すひつに花をさしてみる人のあるに、

炭櫃ニ花ヲ挿ス人

うつみひのちかきかきりはさくら花ちるともちりはたてしとぞ思

経よみてるて侍をきゝて、かくいへる、

讀經

きのふよりとくもおなしきのりなれとちきりをむすふこゑにもあるかな
とあるかへし、

むかしよりとけとつきせぬのりによりちきりをさへはむすひそふらん

もろともなる人の、こひしき人なむある、そちやらんとあれば、

ふるさとにこひしき人のなかりせはこゝろのとかに花はみてまし

あすこむといひたる人の、雨のいたうふれは見えぬにいひやる、

くもらすはおほろけにてはとおもふへしこはあめゆへにさはるものかは

花ちりはてたるころ、人に、

うきこともみてなくさめし花ちりていかてかあるとゝふ人そなき

ほとゝきすなかぬに、人のもとより、
○本集、コノ歌ヲ重出シ、人のかういひたりしニ作ル、

わかさともみやこのくまかほとゝきすなとこゝをしもわきてをとせぬ
○重出ノ歌、初句ヲわかやとはニ、

結句ヲよきて音せぬニ作ル、

かへし

こゝろにそくまはありけるほとゝきすさてたれにかはをとつれはする
○本集、コノ歌ヲ重出ス、

寛仁四年七月四日

三九七

待人

時鳥

寛仁四年七月四日

三九八

としかへりて、またせちふんせさりし人に、

いつしかとおもひしものをうくひすのはるたゝすとやをとつれもせぬ

うくひすのをそくなくとし、人のもとに、

つれくらくらしわつらふはるの日になとうくひすのをとつれもせぬ

たまさかにとふにつけてやしりぬらんはるのいたらぬたにのむもれ木

人のもとよりいへる、

きみかすむやとにはなかてほとゝきすかひなきみにはなにかをとなふ

かへし

人つてそうれしかりけるほとゝきすいまよりのちもきみにきかせよ

人のもとにやる、

秋風のうらふくことにおきのはのうこきあゆまにきみそこひしき

○本集、コノ歌ヲ重出ス、

かへし

あきかせはふきすきてのみゆくをとをおきのしたはゝうらみこそすれ

○本集、コノ歌ヲ重出ス、

又、かへし

野火ニ焼ケタル殿

時鳥ト修法

病者ニ招カ

人々ト歌ヲ詠ム

ふきかへす風なかりせはおきのはのうらみつとたにいはずそあらまし

むまやの野火にやけたるを、かく人、

はるのひにやけゝむみつのむまやかなふねはさもこそおきにかかれめ

人のかくいへりし、

まとゐしてまつかひあらはほとゝきすきみかみのりのしるしとおもはん

返に、

ほとゝきすまたさらませはわか〔物イ〕のりにたれかこゝろをかく〔ヘイ〕へかりける

○道命法師集ヲ以テ校ス、

〔後拾遺和歌集〕

十五 雜一

わつらふ人の道命をよひ侍けるに、まからて、又の日、いかゝとゝふらひにつか

はしたりける返事に、

よみ人しらす

思ひ出でとふことの葉をたれみましつらきに絶ぬいのちなりせは

〔道命阿奢利集〕

○宮内廳書陵部所藏桂宮本

山吹の花たはせ給〔をうい〕へる人によそへて、人くよみしに、

むかしみしゐての山吹けふはあれとすきにし春はなをそこひしき

寛仁四年七月四日

三九九

歌合

十題和歌

寛仁四年七月四日

四〇〇

或所に哥合するに、神祭と云題を、

をとめこかをふるを「ふりイ」もろのもろこゑはゆくすゑとをき人もきくらん

つれ々なるよのあるに、人々「ふりイ」たいいたしてよむに、春二首、

あらたまのとしこえしより春霞たちるこそまてうくひすのこゑ

風にちる花みることしら雪のふりにしこと「ふりイ」そおもひてらるゝ○本集、以上二首ヲ重出ス、次八首略ス、

七月七日に、人々「ふりイ」哥よむに、

たなはたのけふをくらさむほとはしもきしかたよりもひさし「ふらんイ」からなん

九月ふたつありしとの、○寛弘元年ナラン、のちの九月に、あきすきてあきありといふ題

を人々「ふりイ」よみしに、

わすれてもあるへきものを中々「ふらんイ」におもひをのこすあきにもあるかな

繪ニ和歌ヲ書ス

繪に、身なけむとてたかき岸にゐて、女のなかめたるところにかきつく、○新千載和歌集、繪に女の身なけんとする所にかきつけ侍けるニ作ル、

ともかくもわかみひとつはなしつへしのこらむなこそうしろめたけれ

臨時祭ノ繪

長恨歌ノ障子繪ヲ詠ム

繪に、臨時祭したるかたかきたるかたはらに、「みイ」

をとめこかかさすひかけのかすそひてか「みイ」みの山はてりまさるらん

長恨哥の、みかとのもの所にかへりたまで、むしとものなき、くさかけにあれ

たるを御覽して、なき給所に、○本集、コノ歌ヲ重出シ、障子の繪にみかとのおまへにむし

歌集、長恨哥のゑに玄宗もとの所にかへりてむしともなきくさも

かれわたりてみかとなけ給へるかたあるところをよめるニ作ル、

ふるさとはあさちはらとあれはてよすからむしのねをのみそなく

長恨哥のうた、人のよみはへるに、

ありとたにかてきけむまとの中に人にしられてとしへたるみは

おもひきやみやこのくものうへならてころそらなる月をみむとは○續後拾遺和歌集、コノ歌ヲ收ム、

身にたにもみしとおもひし所しもなみたむせひてゆきもやられす

はるたつひ、もとつけよと、人のいひをこせたれば、

たゆふくれの春をみるかな

とあれは、

寛仁四年七月四日

四〇一

連歌前句ヲ請ハ

長恨歌ノ歌

寛仁四年七月四日

四〇二

田植

けふまでとおもふことたにあるものを
人すくなにて、田うへ侍人の、
さなへとるたこはあまたもなけれども

とあれは、

なはしろ水のかけそゝひける

ある人の、ものへゆくみちにまとひて、もりのなかにいりて、えいきやらていふ、
こはよにまとふみちもあるかな

といへは、

はるははなあきは紅葉とおもふまに

ゆあみけるところに、さくらはなをみて人のいへる、

ゆやにもえたるひさくらのな

かせふけはあみぬ人こそなかりけれ

説經をきゝさしてたちたれば、かくいへる、

きゝさしてのりのむしろをたつ人は

説經

沐浴

道ニ迷フ人

半月

とあれは、

ちへのはちすにゐるなとしらなん

月みれば月はなかはになりけり

とあれは、

おいぬる人のよはりゆくこと

戯歌

毛芋ヲ鬼形
ニ作ル

あるあまの、人のもとに、あめにふりこめられてゐたりときゝてやりし、

つねはいさかへすゝもけふをこそあまこもれりといふへかりけれ

けいものあるを、おにのかたにつくりて人にみすれば、おとこになして、かくか

きつたり、

おそろしきものゝさまかなわれはなをこれかいはならしとそおもふ

かへし

をちつゝむふかきちきりのありければきみかおとこになせりとそみる

とてやりたれば、又法師になしてかくかきたり、

寛仁四年七月四日

四〇三

寛仁四年七月四日

四〇四

とてやよきかくてやよきと見れとなをすくせつたなきものゝさまかな

又返

いかはかりみそのゝつらくありしかはいもかかしらをそれるなるらん

かみなくなりたる人の、急ほうしをわすれて、又の日こひにをこせたる、やるとて、これなくてよことにいかてありつらんとねりのねやと人もこそいへ

禿髪ヲ咲フ

人ノ爲ニ和歌ヲ代作ス

またねぬ人にやらん、哥よみてとせめしかは、ねのひのこゝろを、けふもけふねのひのまつはひきつれとまたねをみぬそかひなかりける

かたらはむなといふ人に、いかにいひやらんなどいふ人にとらす、おもふらん心もしらてかきりなきおほつかなさにまくるたまつさ

返

かきやらんとおもふこゝろはありなからなはしろ水のしはしよとむそ

ある人、けさうする女の、松ふくかせのとひとしていはせたるをとてこふに、ふたつの中【ふたつ】にこゝろにつかむをとて、

名譽ノ歌仙

しられしとおもひはなたはをとにたにきけとも人のいはすそあらまし
よしさらは松ふくかせのをとをたにひとつてならてきくよしもかな

○道命法師集ヲ以テ校ス

〔和歌色葉集〕 上 六、名譽歌仙者

集・打聞に入たる歌よみはおほかれと、むねとおほえたかきは四百五十七人也、○中略

僧七十四人○中略

後拾・金葉・續詞・千載・道命阿闍梨 傳大納言道綱卿息、天王寺別當、

〔梁塵秘抄〕 一今様二百六十五首

和哥にすくれてめてたきは、人丸【柿本】・赤人【山部】・をのゝこまち【凡河内】・みつね【紀】・貫之【紀】・みふのたゝ

みね・遍昭・道命・和泉式部、

〔後六々撰〕 目錄

道命阿闍梨 【六首】

〔勅撰作者部類〕 僧

道命 阿闍梨、天王寺別當、大納言道綱子、後拾遺集 春上、一、夏、三、秋上、一、戀一、

詞花集 春、三、夏、一、秋、三、千載集 春下、一、夏、一、秋上、一、秋下、一、別、新古今集 春上、

別、一、雜 續後撰集 一、雜下、續古今集 下、一、雜 玉葉集 雜三、一、續千載集 一、冬、續後

寛仁四年七月四日

四〇五

名人九人ノ中

後六々撰ニ數ヘラル

歌什

寛仁四年七月四日

四〇六

拾遺集 夏、一、雜 風雅集 春上、一、 新千載集 旅、一、雜 新拾遺集 夏、一、哀、一、 新後

拾遺集 春下、 新續古今集 旅、一、 哀、一、

〔萬代和歌集作者部類〕 道命法師、冬、一、戀四、一、雜一、一、雜二、二、雜

三、一、雜四、二、雜五、二、雜六、一、

〔道命阿奢利集〕 ○宮内廳書陵部所藏桂宮本

〔奥書〕 以他本書加畢、能々校合了、

建仁二年四月十六日

道命法師

傳大納言道綱卿息、

母、

天王寺別當阿闍梨、

永仁五年正月十九日、於西山善峯寺北尾往生院菊房松窓書留之了、

承空

于時、殘雪滿山、似催於春花、薄氷結池、不異於冬水而已、

○道命法師集、永仁以下ノ五十二字ヲ闕ク、

歌集

性激ノ贊

〔御製集竝家集目錄〕 ○京都御所東山御文庫 記録甲二百十三所收 氷甲

道命闍梨集 一册

〔古官庫歌書目錄〕 ○京都御所東山御文庫 記録甲二百十四所收 春御擔子

道命集 一々 〔册〕

〔國朝書目〕 下 新三十六人集 〔藤原〕 基俊、○以上八字ハ、藤原範兼撰スル所ノ後六々撰ヲ誤レルナラン、

道命法師集

〔東國高僧傳〕 六 法輪寺道命傳 ○本文 略ス、

系曰、因果無差、昭如日星、決不可昧、一味因果、則人身喪耳、命公生平持誦、能感

諸神、隨喜讚嘆、能令惡人生天、奈セン因果稍失、自不得免遮障之咎、借使當時無經

王之力、得不危乎、願信心持經者戒之、

○道命示寂ノ日、小記目錄ニ據リテ掲書ス、道命、故東三條院ノ奉爲ノ一條院法

華御八講ニ錫杖ヲ勤ムルコト、長保四年十月二十二日ノ條ニ、藤原公季ノ新寫經

卷供養ニ請ゼラル、コト、寛弘元年十二月三日ノ條ニ、敦明親王ノ御出家ヲ謀ル

トノ風説アルコト、同八年十一月二十四日ノ第二條ニ、三條天皇ノ御眼病ニ依リ

寛仁四年七月四日

四〇七

寛仁四年七月五日

四〇八

テ、法華經ヲ讀誦シ奉ルコト、長和四年閏六月二十六日ノ第二條ニ、後一條天皇ノ賀茂社行幸御祈ノ住吉社御讀經僧ニ定メラル、コト、寛仁元年十一月十日ノ第一條ニ、三條天皇崩御ノ後、中宮藤原妍子ニ櫻花并ニ和歌ヲ獻ルコト、同二年閏四月二十二日ノ第一條ニ、無量壽院ノ落慶供養ニ、堂達ヲ勤ムルコト、本年三月二十一日ノ條ニ見ユ、

五日、甲寅天台座主僧正明救寂ス、

〔左經記〕 七月

五日、座主明救卒去、

〔小記目錄〕

十六臨時六 僧侶入滅事
〇九條家本

同五日、僧正明救入滅事、七十

〔日本紀略〕

後一 七月
條院

四日、癸丑、〇中今日天台座主僧正明救卒、年七十五、或云、五日卒、

〔僧綱補任〕

〇興福寺本

權律師明救 長保二年八月廿九日任、〔朱書、下同〕「五十五、」天台宗、延曆寺、有明親王息男、

年七十五

官歴

權律師

權少僧都ヲ
辭ス

權大僧都

天台座主
僧正

三條天皇ノ
御夢想ニ依
リテ權僧正
ニ任ゼラル

延昌ノ弟子
得度
延曆寺阿闍
梨

申請シテ淨
土寺樂音院
ニ阿闍梨三
人ヲ置ク

〔慈念僧正入室、〕同五年十二月廿九日轉任權少僧都、寛弘元年五月廿七日辭表上、如源讓與、「五十五、」同七年八月廿一日任權大僧都、元前少僧都、同八年四月廿七日轉正、「六十六、」長和二年十二月廿六日轉任權僧正、「六十八、」寛仁三年九月日補天台座主、十月廿日轉正、「七十四、」同四年「七月五日入滅、七十五、」
〔長和二年條裏書〕

權僧正明救、十二月廿七日任、〔三條天皇〕天皇即位以後、耳目共不明也、仍尋有驗僧〔屈〕崛明救、於仁壽殿御修法、結願夜、帝皇御夢、大僧都自左右耳日月共出、入帝御左右眼、覺〔釋之〕語後見色聞音、仍此賞任權僧正云々、

〔僧綱補任〕

〇彰考館本

權律師明救 天台宗、延曆寺、長保二年八月廿九日任、年五十五、臘四十五、兵部卿有明親王男、故延曆寺座主慈念僧正入室弟子、天曆十年九月四日得度受戒、永延二年十月十七日依座主慈仁權僧正奏、爲延曆寺阿闍梨、長保五年十二月卅日任權少僧都、年五十八、任日〔月カ〕五、律師勞四年、寛弘元年五月廿四日上辭表、〇本書、寛弘二年・同三年條ニ、明救ヲ前大僧都ノ項ニ掲グル、以下寛弘六年條マデ、ハ誤ナリ、同四年十二月卅日、淨土寺樂音院申置阿闍梨三人、〇本書、明救ヲ前少僧都ノ項ニ掲グ、〔權脱カ〕同七年八月廿一日任大僧都、六十元前少僧都、辭退之後歷七箇年、〇寛弘七年八月二十一日ノ條參看、同

寛仁四年七月五日

四〇九

寛仁四年七月五日

浄土寺座主
下號ス

世系
有明親王五
母ハ藤原仲
平女

四一〇

八年四月廿七日轉大僧都、長和二年十二月廿六日任權僧正、八十
目共不明、仍於仁壽殿御修法之間、有御夢想、耳目共見色聞聲、仍被賞任之、寛仁三
年十月一日座主宣、同月廿日轉正、七十
或本十五
四、同四年七月五日卒、七十
五、號浄土寺座主、

〔天台座主記〕

二 〇青蓮院所藏

第廿五、僧正明救

浄土寺
座主、

治山一年、

醍醐天皇孫王、兵部卿有明親王五男、母左大臣仲平公女、師主慈念僧正、寛仁三年己
未、十月廿日轉僧正并座主、年七十四、
藤六十五、勅使少納言藤原信通、同廿一日到來、於平等房
請印鑑、同四年 庚申、七月五日入滅、年七十五、
眞濟僧正後身云々、

〔歷代編年集成〕

十八
後一條院

天台座主僧正明救

兵部卿有明親王息、母枇杷大臣女、慈念僧正弟子、長和五年九月任、寛仁四年七月五
日入滅、七十五、號浄土寺座主、

〔尊卑分脈〕

醍醐
源氏

有明親王

二品、兵部卿、
應和元年三廿七薨、

忠清 參木、中將、正三、右衛門督、皇太后權大夫、
母左大臣仲平公女、
〔太〕

泰清 彈正大弼、左京大夫、從三、大藏卿、
母同、

寛仁四年七月五日

浄土寺座主
下號ス

世系
有明親王五
母ハ藤原仲
平女

四一一

八年四月廿七日轉大僧都、長和二年十二月廿六日任權僧正、八十
目共不明、仍於仁壽殿御修法之間、有御夢想、耳目共見色聞聲、仍被賞任之、寛仁三
年十月一日座主宣、同月廿日轉正、七十
或本十五
四、同四年七月五日卒、七十
五、號浄土寺座主、

〔天台座主記〕

二 〇青蓮院所藏

第廿五、僧正明救

浄土寺
座主、

治山一年、

醍醐天皇孫王、兵部卿有明親王五男、母左大臣仲平公女、師主慈念僧正、寛仁三年己
未、十月廿日轉僧正并座主、年七十四、
藤六十五、勅使少納言藤原信通、同廿一日到來、於平等房
請印鑑、同四年 庚申、七月五日入滅、年七十五、
眞濟僧正後身云々、

〔歷代編年集成〕

十八
後一條院

天台座主僧正明救

兵部卿有明親王息、母枇杷大臣女、慈念僧正弟子、長和五年九月任、寛仁四年七月五
日入滅、七十五、號浄土寺座主、

〔尊卑分脈〕

醍醐
源氏

有明親王

二品、兵部卿、
應和元年三廿七薨、

忠清 參木、中將、正三、右衛門督、皇太后權大夫、
母左大臣仲平公女、
〔太〕

泰清 彈正大弼、左京大夫、從三、大藏卿、
母同、

頭 正清 左中將、正四下、
新古作者、

文 守清 彈正大弼、從四上、

山 明救 權僧正、座主、號浄土寺、

〔本朝皇胤紹運錄〕

有明親王 三品、兵部卿、

忠清 參議、正三位、右兵衛督、
母睦子、仲平公女、

泰清 從三位、大藏卿、
母同、

守清 從四上、大弼、有子孫、已上爲源氏、
母同、

山 僧明救 權僧正、座主、號浄土寺、

〔遮那業血脈譜〕

天台圓教菩薩戒相承
〇青蓮院所藏

〔四〕〔宋書、下同〕
〔十五〕慈念僧正 諱延昌、

〔十六〕
〔五〕慈忍僧正 諱尋禪、

明救僧正

〔諸嗣宗脈紀〕

天台宗

寛仁四年七月五日

四一一

寛仁四年七月五日

四二二

良源御廟大師、

慈悲、

明救僧正、

〔小右記〕 長和四年五月

十六日、乙未、○中 頭中將云、〔藤原資平〕 依仰今朝向淨土寺僧正許、○中 先日僧正令奏云、有可

除愈御目病之法、其文給資平可見者、仍所差遣、件法千手法可加供日天之法也、僧正

云、受習故良源僧正之祕法也、○中 者、○明救、藤原道長ノ意ヲ憚リテ修法ヲ辭スルコト及ビ道長、之ヲ怒リテ明救ヲ罵ルコト、長和四年五月十日ノ條ニ見ユ、

〔僧綱補任〕 乾 寛弘元年

○彰考館本

弟子如源

權律師如源 天台宗、延曆寺、寛弘元年五月廿四日任權律師、明救 讓、年卅、臘廿、○中

太政大臣仁義公息男、圓融院禪定法皇御弟子、權僧正尋禪入室弟子、明救僧都弟子、

〔僧綱補任〕 乾 治安元年

○彰考館本

尋空

律師尋空 天台宗、延曆寺、慈仁權僧正入室弟子、又明救僧正弟子、

驗者

〔二中歷〕 十三 驗者 明救 僧正、座主、

名人歷

淨土寺

〔遮那業血脈譜〕 裏書

○青蓮院所藏

明救 座主、僧正、寛弘四年七月五日入滅、號淨土寺座主、慈念僧正 延昌弟子、兵部卿有明親王

淨土寺僧正
良源ヨリ眼
病平癒ノ祕
法ヲ傳受ス

眞濟ノ後身
トノ説話

穀漿ヲ斷チ
豆ヲ食トス

天狗ノ化身
トノ説話

五男、昔眞濟外甥〔惟喬親王〕紀皇子之遺恨、受天孤身〔孤乙〕惠亮之門徒、臨延昌室、伺短、聞僧正誦尊勝陀羅尼、發心誓言、依此咒、脫惡趣方、生人間、以某年月日、參大師室、可成弟子、當其約期、親王隨身子付僧正、明救是也、前生有苦行遺之產童、後不受穀漿、只煎豆爲食云々、

〔今昔物語〕 二十 天竺天狗聞海水音渡此朝語第一

本朝付佛法

今昔、天竺ニ天狗有ケリ、天竺ヨリ震旦ニ渡ケル道ニ、海ノ水一筋ニ、諸行無常、是生滅法、生滅々已、寂滅爲樂ト鳴ケレ、天狗此ヲ聞テ大ニ驚テ、海ノ水何〔テイ〕止事无キ甚深ノ法文ヲハ可唱トキソ、恠ヒ思テ、此ノ水ノ本躰ヲ知テ何テカ不妨テハ有ラム思テ、水ノ音ニ付テ尋ネ來ルニ、震旦ニ尋ネ來テ聞ニ猶同シ様ニ鳴ル、然ハ震旦モ過テ、日本ノ境ノ海テニシ聞クニ、猶同シ様ニ唱フ、其ヨリ筑紫ノ波方ノ津ヲ過テ、文字ノ關シテ聞ニ、今少シ高ク唱フ、天狗彌ヨ恠テ尋ネ來ル程ニ、國々ヲ過テ河尻〔ニイ〕尋ネ來ヌ、其ヨリ淀河ニ尋ネ入ヌ、今少シ増テ唱フ、淀ヨリ宇治河ニ尋ネ入レハ、其二彌ヨ増テ唱フレ、河上ニ尋ネ行ニ、近江ノ湖ニ尋ネ入ニ、彌ヨ高ク唱レハ、猶尋ニ、比叡山ノ横河ヨリ出タル一ノ河ニ尋ネ入ニ、此ノ文ヲ喞シク唱フ、河ノ水ノ上ヲ見レハ、四天王

寛仁四年七月五日

四二三

寛仁四年七月五日

四一四

大豆ノ僧正
ト稱ス

眞濟ノ怨念

及ヒ諸ノ護法此ノ水ヲ護リ給フ、天狗此ニ驚キ、近クモ不寄^テス、此事ノ不審サニ隠レ居テ聞ニ、肺ル、事無限シ、暫許有テハ、□中ニ劣ナル天等ノ近ク御^ニスル、天狗恐々ツ寄テ、此ノ水ノ此ク止事无キ甚深ノ法文ヲ唱ハル、何ナル事ソト問ハハ、天等答テ云ク、此ノ河ハ比叡ノ山學問^{ニイアリ}スル多ノ僧ノ廁ノ尻也、然レハ此ク止事无キ法文ヲハ、水モ唱フル也、此ニ依テ此ク天等モ護リ給フ也ト、天狗此レヲ聞テ、妨^トケム思ツル心忽ニ失テ思ハク、廁ノ尻タニ猶此ク甚深ノ法文ヲ唱フ、況ヤ此ノ山ノ僧ノ貴キ有様ヲ思ヒ遣ルニ云ハム方无シ、然レハ我レ此ノ山ノ僧ト成^トラム誓ヲ發シテ失リ、其ノ後、宇多^マノ法皇ノ御子ニ兵部卿有明ノ親王ト云フ人ノ子ト成テ、其ノ上ノ腹ニ宿^ムテナ生タル、誓ノ如ク法師ト成テ、此ノ山ノ僧ト有ケリ、名ヲハ明救ト云フ、延昌僧正ノ弟子トシ、止事无ク成リ上テ、僧正マテ成リ、淨土寺ノ僧正ト云リ、亦大豆ノ僧正トモ云^トヒケリ語リ傳ヘタト也、

〔平家物語〕

十五
長門本

○上略、惟喬・惟仁兩親王、
儲位ヲ爭フコトニカ、ル、

惟喬ノ御祈師柿下ノ紀僧正眞濟は、此

事を鬱し思ひて、惠良和尚の御弟子をそ取失ひける、平等坊の座主慈念僧正と申人は和尚の末の門弟にてまし^{〔縁カ〕}けり、彼僧正尊勝陀羅尼を滿て、^{〔縁カ〕}挺行道しておはしけ

有明親王
救ノ食トシ
テ大豆ヲ送
リ給フ

鳩の禪師

御修法ヲ修
シテ奇驗ヲ
著ス

るに、庭上にほれ[〜]とある物のおろ[〜]としたる物をきて、老法師の眼おそろしけなるかうつくまり居たりけるを、僧正たゝものにあらずと見給ひければ、あれは何者そと問給ひければ、我は眞濟なり、和尚の御弟子をは末までとり奉んと思て、僧正を思ひ懸け奉りてうかゝひ侍るほとに、尊勝陀羅尼を尊くしゆせさせ給へるを聽聞仕て、惡念忽にとけて、信心發り侍れば、このよしをしらせ申さんとてみえ奉るなり、今は御弟子となりて縁を結ひ奉るへし、御弟子の中に異様のもの出來は、我と思召すへしと云てうせにけり、僧正は眞濟の顯れて出し事を不思議に思して、年月を送り給ふに、兵部卿の親王と申人の御子の若君^{〔明教〕}をくし奉りて、僧正の御も^トにおはして、弟子になしてかへり給ける、この君の食物をはあれより奉るへしとて出て給ければ、僧正も心得す思召ける程に、京より若君の御召物とて大豆を送らせ給ひけり、この若君大豆より外は召さゝりければ、僧正思召けるは、眞濟の異様の者出來は、我としれとのたまひしかは、此君は紀僧正の再誕とそ知り給ける、出家の後は鳩の禪師とそ人申ける、

〔眞言傳〕

五

僧正明救ハ兵部卿有明親王息、慈念僧正ノ弟子也、三條院即位ノ後、御目冥、御耳聞ヘ玉ハス、是ニ依テ明救ヲ召テ仁壽殿ニシテ御修法ヲ始メシム、結願ノ

寛仁四年七月五日

四一五

夜、太后御夢ニ、阿闍梨ノ左右ノ耳ヨリ日出テ、帝ノ御眼ニ出入スト見玉フ、其後主
上色ヲミ音ヲキ、玉フコトヨノツネナリ、是ニ依テ權僧正ニ任セラル、是長和六年也、
寛仁三年十月ニ正ニ轉ス、同十一月ニ座主ニ補ス、同四年七月五日入滅、年七十五、

〔華頂要略〕

八十三

附屬諸社一

淨土寺

在愛宕郡上粟田郷、今稱淨土寺村、銀閣寺是也。門葉記曰、當寺者附屬無動寺大乘院、又云、金剛壽

院管領之、明救僧正開基、僧正者兵部卿有明親王息、則號淨土寺僧正。

○明救示寂ノ日、左經記ニ據リテ掲書ス、愚管抄・元亨釋書・明匠略傳・諸門跡
譜・歷代皇紀・東寺王代記・本朝高僧傳等、異事ナキヲ以テ略ス、明救、主殿寮
ニ於テ、觀音法等ヲ修スルコト、長徳四年七月二日ノ條及ビ同月十日ノ第一條ニ、
藤原道長ノ病ニ依リテ、修善ヲ行フコト、長保二年四月二十七日ノ條ニ、疫癘祈
禳ノ爲ノ内裏十二門ノ大般若御讀經僧ニ定メラル、コト、同三年五月二十九日ノ
條ニ、藤原行成ノ男兒出生ヲ訪フコト、同年十月九日ノ第二條ニ、東三條院藤原詮子
ノ周忌御齋會ニ、讀師ヲ勤ムルコト、同四年十二月二十一日ノ條ニ、道長室源倫子
ノ仁和寺大般若經供養ノ唄師ト爲ルコト、寛弘元年三月二十五日ノ條ニ、道長ノ

淨土寺ノ開基

清水寺參詣ニ際シテ修善ヲ行フコト、同年九月二十八日ノ條ニ、中宮藤原彰子ノ御修
善ニ奉仕スルコト、同三年四月八日及ビ同五年五月二十三日ノ條ニ、道長ノ法性
寺五大尊修法及ビ淨妙寺多寶塔供養ニ請ゼラル、コト、同四年二月五日ノ第二條
及ビ同年十二月二日ノ條ニ、中宮御産御祈ノ御修善ニ奉仕スルコト及ビ皇子敦成
ノ御誕生ニ際シテ五壇法并ニ護身法ヲ修スルコト、同五年七月二十日ノ條及ビ同
年九月十一日ノ第三條ニ、一條天皇ノ御出家・御臨終及ビ御葬送ニ候スルコト、
同八年六月十九日・同月二十二日・同月二十五日及ビ同年七月八日等ノ諸條ニ、
同天皇ノ御遺骨ヲ安置シ奉ルベキニ依リテ、圓成寺ニ於テ阿彌陀護摩ヲ修スルコ
ト、同月九日ノ條ニ、同天皇ノ七々日御法會ニ三禮ヲ勤仕スルコト、同年八月十
一日ノ第二條ニ、冷泉天皇ノ七々日御齋會ニ咒願ヲ奉仕スルコト、同年十二月七
日ノ條ニ、三條天皇ノ御惱ニ依リテ、御修法ヲ行フコト及ビ御讀經ニ不參ノコト、
長和元年七月十七日ノ條及ビ同年八月十六日ノ第二條ニ、中宮藤原妍子ノ御修善ニ奉
仕スルコト、同二年二月二十日ノ第二條ニ、道長ノ夢想ニ依リテ、修善ヲ行フコ
ト、同年三月三日ノ第三條ニ、皇女禎子御誕生ノ由ヲ藤原資平ニ告グルコト、同

年七月六日ノ條ニ、道長ノ法性寺五壇修法ノ阿闍梨ト爲ルコト、同年八月十四日ノ第二條ニ、腫物ヲ患フコト、同年々々末雜載、疾病・生死ノ條ニ、内裏御修法ニ奉仕スルコト、同三年五月二十四日ノ條及ビ同年十二月十九日ノ第一條ニ、道長ヨリ天台座主ニ推舉セラルト雖、成ラザルコト、同年十二月二十六日ノ第一條ニ、三條天皇ノ御眼病ニ依リテ、内裏ニ於テ七佛藥師法并ニ降三世法ヲ、延曆寺御幸ニ際シテ同寺ニ不動法ヲ修シ奉ルコト、同四年五月一日ノ第一條・同年十月三日ノ第一條及ビ同五年五月一日ノ第二條ニ、新造内裏ノ安鎮法修法ヲ辭退スルコト及ビ重ネテソノ修法ヲ命ゼラル、コト、同四年五月二十五日ノ第一條及ビ寛仁元年十月十五日ノ條ニ、内裏ニ參入シテ、後一條天皇ノ御即位ヲ賀シ奉ルコト、長和五年二月二十七日ノ條ニ、僧綱牒ニ名ヲ列ヌルコト、同年五月十六日ノ第二條ニ、後一條天皇ノ御惱ニ依リテ、御修法ヲ修スルコト、同年九月十四日ノ條ニ、新造内裏ニ於テ、安鎮法ヲ修シ、九壇護摩ヲ行フコト、寛仁二年三月九日ノ條ニ、法印院源ヲ天台座主ニ補スルコト、本月十七日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔山城名勝志〕

十三 愛宕郡三 淨土寺 今寺絶爲村名、在鹿谷村北、今草堂一字安彌陀、立像三尺、傳云、慈覺大師所彫也、是當寺本尊云云、土人云、舊跡今慈照寺地也、

十七日、丙寅法印院源ヲ天台座主ニ補ス、

〔小右記〕

○京都御所東 七月 山御文庫本

十七日、丙寅、○中宰相資平云、山座主宣命事中納言經房承行、少納言三人皆有故障、二人瘡瘡○是春ノ條參看、後未從事、只信通一人也、而請三十箇假〔百脱カ〕〔藤原道長〕、入道殿被召仰外記云、更不可忌觸穢、早可參入、差幹了使部等可令召者、

卅日、己卯、宰相來云、○中略

入道殿命云、天台座主院源非山阿闍梨、今有山阿闍梨闕、可改補敷、有前例由云々、而不能尋得、又云、愜云人齊信卿云、無所見、可被尋符案者、資平申云、康保三年良源被任座主之時、○康保三年八月二十七日ノ第一條參看、改補山阿闍梨之由、具見御記、齊信卿再三傾問、又入道殿曰、愜有所見乎、申云、所愜覺也、件事如宰相陳、○コノ本、マ、闕字アリ、流布本ヲ以テ補フ、

〔左經記〕 七月

十七日、丙寅、今〔杖召仰内記、令作山座主宣命、法印院源、爲使召少納言信通朝臣、而稱觸死穢之由不參、有不可被忌仰、重召之、宣命使稱兩度不堪不之由、構唐穢由申之由云〕

宣命上卿源經房使ノ少納言觸穢ヲ稱ス

院源ヲ延曆寺阿闍梨ニ改補セントス良源ノ先例

藤原道長強スヒテ使ヲ召

寬仁四年七月十七日

々、仍及亥尅參入、召左仗〔給九〕宣命、及明日登山之由、

〔日本紀略〕後一條院 七月

十七日、丙寅、宣命、以法印院源爲天台座主、

〔僧綱補任〕三興福寺本

法印院源 十月十九日補天台座主、號西方座主

〔僧綱補任〕乾彰考館本

權僧正院源 十月九日座主宣、七十、或本七月十四日座主、十二月廿日任權僧正、

〔天台座主記〕二青蓮院所藏 第廿六、僧正法印院源西方院、治山八年、

寬仁四年庚申、七月十七日座主宣命、年七勅使少納言藤原信通、同十八日到來、八月十

九日於東陽房請印鑑、

〔座主宣命〕天台座主 宣命事

第廿六、院源僧正 寬仁四年七月廿七日補、十四イ○法中補任・歷代編年集成等、補任ノ日ヲ七月十四日ニ作ル

宣命云、使少納言藤原信通、十八日到來、

天皇我詔旨一 同前、

印鑰ヲ請ク

四二〇

西塔院主實誓ノ補任

〔法家相承次第〕西塔院主次第

實誓權少僧都 院源代歟、

寬仁四年西方院僧正院源任座主、此時實誓補院主歟、時治山八年也、院主又同歟、

〔法中補任〕實幢院檢校次第 號院主、院源代

寬誓權少僧都 寬仁四年西方院僧正院源任座主、此時實誓補院主歟、時治山八年也、院主又同歟、

院主又同歟、

○二中歷・愚管抄・歷代皇紀等、異事ナキヲ以テ略ス、西塔院主ヲ補スルコト、

便宜合敘ス、

十九日、辰戌丹生・貴布禰兩社ニ、祈雨奉幣使ヲ發遣セントス、

〔小右記〕○京都御所東山御文庫本 七月

十九日、戊辰、○中宰相資平午時許來、○中又云、○中關白從今日四个日堅固御物忌、

昨日有犬產穢、而不申事由、今日披露、其穢昨到內裏、仍丹生・貴布禰等使俄止、

〔左經記〕七月

十八日、丁卯、及午後參內、藤原敦通左大將被參於左仗、召陰陽寮、爲祈雨可被立丹生・貴布

寬仁四年七月十九日

四二一

日時勘申

穢內裏ニ入ルヲ知リテ俄ニ發遣ヲ

寛仁四年七月十九日

四二二

幣料ノ請奏

上卿藤原教通
幣物ヲ襄ム
黑馬
宣命ヲ奏ス
六位藏人ヲ使ト爲ス

禰使日時可勘申者、即勘申十九日・廿二日、令藏人(平)範圍被奏、十九日可立者、次召内記被仰可作宣命之由、余召仰神祇官、令奉幣料請奏、即覽上卿、次給史、令催幣料、又仰左右馬寮、召黑御馬一疋之、(給宣旨)

十九日、戊辰、(中略、政ノコトニカ、ル、八月九日ノ條ニ收ム、)頃之左大將被參内、余觸事由參内、仰史令神祇官人襄二社幣物等、(於南所内北邊、史・官掌等相共加實檢、神祇官人襄幣物立外記門南北腋、丹生南・貴、又引立黑馬二疋、)大將進御所、被奏宣命草・清書、還左仗、令外記召使々、丹生使藏人左兵衛尉藤原教任、經小階南砌進著膝突、給宣命、出自敷政門、次貴布禰使藏人縫殿助藤原良任、同給宣命、進退儀如前、次大將被退出、關白殿有犬死穢之由云々、

〔日本紀略〕

(後一條院) 七月

十九日、戊辰、奉幣丹・貴二社、使殿上六位、

○コノ後、奉幣使ヲ發遣スルコト、詳ナラズ、

關白内大臣藤原賴通、内大臣ノ辭表ヲ上ル、尋デ、勅シテ、之ヲ許シ給ハズ、

〔小右記〕

(京都御所東山御文庫本) 七月

十九日、戊辰、(藤原賴通)關白上辭内大臣表、(被許云々)

〔小右記〕

(前田家本) 十一月

御厨子ニ納メタル上表文紛失ス
女房破リ用ヒシカ

表ヲ更メ書シテ上ル

上表使源顯基

八日、乙卯、(中略)藏人左衛門尉範圍宣旨持來、以宰相(藤原資平)令傳、聊有所障不能相逢、宰相云、範圍談云、關白表於御所紛失、件表頭中將朝任・藏人定親相共納大床子上御厨子、近來可給勅答云々、而無本御表如何、未及漏達、兩人歎息云々者、(藤原)章信云、置々物御厨子、女房破用歟者、

閏十二月

卅日、丙子、(中略)

先日關白辭内大臣之表於御在所紛失、又於彼殿密々令書又上、今夜有不收之勅答云々、大納言(藤原)行成奉之、

〔左經記〕 七月

十九日、戊辰、(中略)又今日可被奉辭内大臣表、留表不可有勅答云々、御使四位少將顯基、八月

廿五日、甲辰、(中略、藤原賴通、鹿島・香取兩社ニ奉幣シ、併セテ封戸ヲ寄進シ奉ルコトニカ、ル、八月二十五日ノ條ニ收ム、)

寛仁四年七月十九日

四二三

月餘ヲ經ル
モ選任ノ宣
旨ナシ

勅答ノ上卿
藤原行成

勅答使藤原
公成

寛仁四年七月二十二日

四二四

人々被議云、件封戸、先例分大臣封寄之由、有例文等、而令辭内大臣給之後、未无還任宣旨、爲之如何者、送文等波誰家上加可書者、有定、關白内大臣家上被書了、是令辭給之由、諸司未知、仍可書也者、愚案、此事未得意之、

閏十二月

卅日、丙子、陰、不雨、○中略參内、○中略權大納言被參、頭中將朝任、下關白殿辭内大

臣表、去七月辭之、所乞不免之由、仰可令作勅答狀、頃之大納言召内記孝親於陣膝突、

仰可作勅答狀、頃之大納言進弓場奏勅答草・清書等、頭中將申太宮云々、令右頭中將中使藤原公成、

遣關白里第、

〔公卿補任〕

七

關白内大臣正二位藤原賴通、廿九、七月十九日上表、壬十二月卅日

勅答、不許、

○賴通、病ニ依リテ、關白等ノ辭表ヲ上ルコト、六月十四日ノ第一條ニ、同ジク、

修法ヲ行ヒ、又、法性寺ニ參籠スルコト、本月二十五日ノ條ニ見ユ、

二十二日、辛未入道前太政大臣藤原道長、疫癘消除ノ爲ニ、無量

壽院ニ於テ、百座仁王講ヲ行フ、

一日一時
經ヲ新寫ス
先月企ツル
所

〔左經記〕 七月

廿二日、辛未、○中略入道殿於無量壽院、請百僧、立百高座、燒百和香、一日一時講仁

王經、佛・經新被圖寫是爲消除疫病、去月所被企也、而依事障延及于今也、及晚景事了、殿

上人・諸大夫取祿施諸僧之、

〔小記目錄〕

九佛事上 諸家讀經事
○九條家本

同月廿二日、無量壽院百座仁王講事、

○瘡瘡流行スルコト、是春ノ條ニ、疫癘ニ依リテ、大般若臨時御讀經ヲ行ヒ、道

長モ亦、無量壽院ニ於テ、十一面經ヲ講ズルコト、六月二十二日ノ第一條ニ見ユ、

二十五日、戊甲是ヨリ先、關白内大臣藤原賴通、瘡病ニ依リテ、

不斷仁王經讀經并ニ軍荼利法ヲ修ス、是日、知足院ニ詣シ、尋

テ、法性寺五大堂ニ參籠シテ、ソノ平癒ヲ祈ル、

〔小右記〕

○京都御所東 七月
山御文庫本

廿五日、甲戌、早且宰相資平云、或云、關白參智足院、爲被祈瘡病云々、

昏里新宰相來云、候入道殿、〔從智〕知足院廣業參來申云、雖非如昨、頗發惱給者、又云、

寛仁四年七月二十五日

四二五

深覺孔雀經ヲ轉讀シテ效驗アリ引出物重ネテ發病ス藤原道長モ共ニ法性寺五入ル

公卿法性寺ニ參會ス賴通ノ物忌

仁王經讀經七箇日心譽ヲシテ軍茶利法ヲ修セシム

入道殿參內給、宰相從入道殿來、入夜退、

廿六日、乙亥、○中昏黑宰相來云、參候關白殿、東大寺別當僧正深覺、從今曉不食、轉讀孔雀經致祈願、依其驗德不發給、有引出物等、入道殿馬一疋、關白殿二疋、

廿七日、丙子、宰相資平語、〔來脫カ〕移時剋退、黃昏示送云、〔藤原〕佐光朝臣云、關白重發給、今夕入道殿相共被參法性寺〔五一〕大堂、依今日發惱、入道殿歎息無極者、

廿八日、丁丑、宰相資平來云、今曉關白參法性寺、去夕入道殿被參也、緣關白瘡病祈事云々、○中〔藤原實資〕余有所惱不參啓、關白瘡病事、示達致仕納言、報云、關白昨更發、半夜坐法性寺已了、午時許可參入者、衝黑宰相來云、參法性寺、關白已不發給、致仕大納言俊賢以下卿相十一人參會、入道殿歸給、關白自明日四个日物忌、即於此堂可被慎者、

○流布本ヲ以テ校ス、

〔左經記〕 七月

十三日、○中爲關白殿御、於彼殿令九口僧、限七箇日、讀不斷仁王經、〔廿〕讀者依御惱所被願、御惱不怠、始自今夜、令心譽僧都、同爲殿御、令修軍茶利法、番僧仕申留非延、九口、

廿六日、乙亥、○中參入道殿、次參關白殿陣、禪林寺僧正深覺、自今曉被候奉加〔持カ〕

病已不令發給、及曉景有牽出物、馬二疋、又自入道殿有御馬一疋、上下道俗隨喜無限、〔目〕月者有御惱、久無御歩、種々御祈甚以多々也、頗有減氣之旨、又日來令惱瘡病給、雖施方々治術、更無其驗、而僧正揭被施其驗、誠可隨喜々々、入夜歸宅、〔露脫カ〕

廿七日、丙午、傳聞、關白殿又令發惱給、入夜入道殿相共令詣法性寺五大堂給云々、廿八日、丁丑、早旦參法性寺、於五大堂、入道殿并諸有驗人々相共奉加持、關白殿及日入已不發、仍入道殿於寺中諸堂被行諷誦、

八月 六日、乙酉、風聞、關白殿自令籠法性寺給以來、瘡病已不令發給、又始自去月廿九日七今日、以三口僧心譽・明尊・成典、於五大堂被修御修法云々、御物氣等不加々治、〔持〕自然調伏云々、

七日、丙戌、參入道殿并關白殿・内・上東門院等、關白殿今日自法性寺出御、八日、丁亥、參入道并關白殿等、

〔小記目錄〕 二十 御惱事 臣下 同年七月十三日、關白所惱事、〔寛仁四〕

道長諷誦ヲ行フ 再發セズ 修法七箇日 物怪自ラ調伏セララル 法性寺ヨリ出ヅ

寛仁四年七月二十六日 二十九日

四二八

○頼通、病ニ依リテ辭表ヲ上ルコト、六月十四日ノ第一條及び本月十九日ノ第二條ニ見ユ、

二十六日、乙最勝講結願、

〔左經記〕 七月

廿六日、乙亥、最勝講結願、

○發願ノ日、詳ナラズ、

二十九日、戊皇太后宮ニ於テ、御釋經アリ、

〔小右記〕

○京都御所東山御文庫本 七月

卅日、己卯、宰相來云、昨日大納言齊信卿・中納言經房・參議公信・經通・資平參入、

依卿相數少無定、大納言已下參皇太后宮、依例〔釋〕經事、○流布本ヲ以テ校ス、

○定ヲ延引スルコト、便宜合敘ス、

定ヲ延引ス
例講

大日本史料 第二編之十五終

大日本史料 第二編之十五

昭和四十年三月二十日發行

價 一、八〇〇圓

著 作
所 有
權

編纂者 東京大學史料編纂所

發行者 東京大學

印刷者 株式會社 精興社

白井倉之助

發賣所 財團 東京大學出版會

振替口座東京五九九六四番
電話小石川(81)八八一四番

製 本 株式會社 松岳社





